

新刊紹介

V・L・ヤーニン著（松木栄三・三浦清美訳）

『白樺の手紙を送りました』

—ロシア中世都市の歴史と日常生活—

渡辺晃宏

本書は、ロシアのノヴゴロドを中心とした地域で一九五一年以来これまでに千点近く発見されている白樺の樹皮に書かれたロシア中世の文書、白樺文書についての一般向け著作の邦訳である。

本書の刊行を新聞広告で知った時、私はまずそのタイトルの美しさに魅かれ、すぐには数年前木簡学会研究集会で報告を伺ったヤーニン氏の業績と結び付けることができなかつた。こう言つてはやや失礼かも知れないが、ヤーニン氏の厳格かつ広範な学問に接したこのある者にとって、その一般向けの邦訳書が刊行されることなど思ひも寄らなかつたからである。

しかし、読み進むうちに、私はその説得力のあるわかりやすい語り口の魅力に取り付かれてしまつた。学問的な興奮と推理小説を読むようなスリリングな刺戟を味わい、白樺文書について文字通り眼からうろこの落ちる思いを味わつたのである。タイトルから抱いた魅力には全く偽りがなかつた。木簡学会会員はもちろんのこと、文献史学や考古学に志す方々ばかりでなく、広く一般の人々にも是非

一読をお勧めしたい書物である。

初めに本書の目次を掲げておく。

日本語版への序 まえがき もへん

第一部ネレフスキイ発掘のドキュ 1951—1962' 1969

1 宛名はノヴゴロド市、ドミートリイ通り、発掘現場 2 あなたに白樺の手紙を送りました 3 子供の言葉を通して 4 一人の市長 5 市長の文書を探して 6 農民どもが叩頭…… 7 オンツィ フォルの手紙 8 手紙の受取り人は誰か 9 マクシムは一人いたか 10 七年がすぎて

第二部市場側にて 1962—1974

11 イリイナ街にて 12 交易についで 13 紛失した遺言

第三部トロイツキー発掘のドキュ 1973—

14 ある市長一家の歴史断章 15 ロシカの祖先 16 オリセイ・グレチンの屋敷にて 17 グレチンの描いたフレスコ画 18 人間と法律 19 隣人たちの宴 20 文書の主題は限りなく多い 21 ある葬式の収支決算 22 白樺文書はどこでも見つかる

あとがき 訳者あとがき 白樺文書の刊行文献一覧 図版出典一覧 著者のヤーニン氏は一九二九年生まれ、現在モスクワ大学考古学講座の主任教授、ロシア科学アカデミー常任委員会委員、その業績は五〇〇点以上にも及ぶという。白樺文書発見は師のアルツィホフ

スキーの手にかかるもので、ヤーニン氏は師の後を受けてノヴゴロドの白樺文書研究の第一人者として、その整理・解説・刊行に従事している。その学問は歴史学・考古学・印章学・貨幣学・碑銘学・地名学・歴史地誌学・史料学など広範な分野にわたるというが、その学風の根底に白樺文書研究が位置しているのは疑いない。

本書はその適任の著者による白樺文書の発掘・研究の記録である。それはもくじに示されるようにまさにドラマであり、手に汗握るノンフィクションの趣を呈する。ネレフスキイ発掘の地が、次々に発見される白樺文書によって、中世ノヴゴロドの市長を輩出したミーシャ・オンツィフォル一族の屋敷地であることが解明されていく過程（第Ⅰ章4～10）、あるいはまた聖職者オリセイ・グレチンと絵師オリセイ・グレチンが重ね合わされていく過程（第Ⅲ章16・17）などはまさに圧巻である。しかもそれは白樺文書単独の作業なのではなく、年代記などの既知の文献史料、イコンなどの美術資料他のある要素と、新出の白樺文書とのフィードバックを積み重ねた上の成果であり、木簡の解説の過程と通じるところが大きい。白樺文書が考古資料であることも強調されており、どうして白樺文書が地中深くから良好な状態で発見されるかについてもわかりやすく説明されている。

それでも一一世紀からの九〇〇年間に六七mにも達する文化層が形成されてきたという事実は驚きである。ネレフスキイ区の

場合、文化層形成は一年あたり1cmにも及ぶという。しかもそれは二八層にも及ぶ道路舗装の丸太の年輪年代分析によって、絶対年代を細分できる。本書一一五頁に掲載された木製道路舗装の断面写真には圧倒される思いである。

木簡と白樺文書の共通性は、本書から得られる大きな収穫であるが、ここではあえて木簡との違いに着目して白樺文書の特徴について紹介しておこう。

まず、白樺の樹皮は紙の普及以前の伝達媒体であった。それは白樺文書用の筆記具（ピサロ）が用意されているほど日常的な素材であり、またそれが草書の発達を妨げるなど字体をも規制していた。紙の普及とともに白樺文書もその筆記具も使用が廃れたのである。これに対して日本の木簡の場合は、木・紙併用時代の産物であり、紙を伝達媒体とする際と同様に墨で書かれ、刻書はごく少数である。なお、ロシア中世において紙に相当するものを強いて挙げれば、それは羊皮紙であろう。但し羊皮紙は紙と違って再利用が可能で、白樺文書との使い分けについてもう少し著者の意見を聞いたかった。

次に、白樺文書は木製舗装の間や文化層中に紛れ込んで見つかる。不要になつたらそのまま地面に廃棄したのである。中世ノヴゴロドの住民は棄てられた手紙の上を歩き回ることを意識していたというから面白い。もともと自然の素材であるから土に返すといえばそれまでだが、この廃棄方法はあまりにプリミティブである。日本の木

簡、ことに古代の木簡の場合には何らかの遺構に伴うことが多い。

つまり意識的にゴミとして廃棄される。遺物包含層（文化層）中からの出土も稀ではないが、例えば自然流路からの出土でもそれは川に投棄されたものが流されてきたのである。地面あるいは床面にそのまま棄てるということはまざない。ノヴゴロドにおけるこうした特異な廃棄方法は、住民に井戸や柱穴を掘ることを忌避させたほど豊富な地下水をもつという立地環境に影響されるところが大きいといわれる。

この差異は恐らくもう一つの特徴とも結びついている。それは白樺文書は基本的には個人に関わる手紙であるという事実である。それもノヴゴロドの都市内ではなく、ノヴゴロド以外の場所とやりとりした私信が大半を占めているという。要するに一度に大量に白樺文書が保管されるという状況にはなかつたのであろう。これに対し日本の木簡、ことに古代のそれは役所で用いられた公文書であり、大量使用の産物であった。また公文書であればこそ不要になつてからでも廃棄には気を遣う必要があつた。

一つだけノヴゴロドの白樺文書と日本の木簡との類似性について述べておきたい。それはノヴゴロドの白樺文書と長屋王家木簡の文書木簡との内容的な親近性についてである。白樺文書には当該屋敷地の住人の農村経営に関わる細かな指示を与える手紙が多数含まれている。これらは長屋王家木簡の大命木簡や奈良務所宛の二品親王家の家政機関の文書木簡を彷彿とさせる。都市の住人としての家政、ことに経済基盤としての農村経営に関わる手紙という点で両者は共通するのである。長屋王家木簡を考える時、律令制に基づく文書主義が家政機関内部の木簡にも貫徹されているという見方が強いけれど、家政運営の内部に律令制以前から存在してきた木簡が律令制化

伴わずに屋敷地から普遍的に出土するという状況は、住人特定をさらに容易にしている。例えば平城京の場合、出土遺物から住人を決定できた事例は僅かに長屋王の一例だけであり、平城宮内の役所の比定でさえ慎重な検討を要することを思えば、白樺文書のあり方は、日本の木簡研究者にとってまことに羨望の的といつてよいが、それは白樺文書の内容的な特質に基づいているわけである。

私信としての白樺文書の特性は、逆に些末な事実の追加だけに終始するという危険性を常にはらんでいるが、どんなに小さく見える事実でも、予め用意されていたパズルの断片のように大きな歴史の流れの中にきちんとあてはめていくヤーニン氏の歴史家としての手腕はまさに確かである。

したものとして、長屋王家の文書木簡を捉える視点も必要であろう。

ヤーニン氏は一九九五年一一月末から一二月初めにかけて木簡学会の招きで来日し、第一七回研究集会において「ノヴゴロドの白樺文書」と題する講演を行つており、この時もノヴゴロドの白樺文書と日本の木簡との比較検討について有意義な討論が行われたと記憶している。報告内容そのものは「ノヴゴロド白樺文書」として本誌第一七号（一九九六年一月刊）に掲載されており、要点に即したより簡潔明快な形で白樺文書が紹介されている。とはいえて学問的に整理された報告内容を理解する上で、今回刊行された本書を通読することが大きな手助けになつたのもまた事実である。白樺文書に興味をもたれる方には、是非両者を併せ読まれることをお勧めしたい。

ところで、研究集会報告時にヤーニン氏の紹介の労をとられ、本誌掲載論文の翻訳を担当されたのが本書の訳者のお一人である静岡大学の松木栄三氏であり、報告時の通訳を担当されたのがもう一人の訳者電気通信大学の三浦清美氏であった。両氏はこれを契機に翌年ヤーニン氏のもとで実際にノヴゴロドの発掘を経験され、本書の原著となつた第三版の刊行を促し、日本語訳の刊行を申し出られたという。本書がこのような形で刊行されるにおいて果たした松木・三浦両氏の労にはまことに大きなものがあつたのである。訳文とは思えない流れのような日本語や、原著にない図版を多数掲載して読者の便宜を図るまことに良心的な編集は特筆に値する。また、

本書刊行に至る木簡学会の役割には小さからぬものがあつたわけであり、その意味でも本書の刊行を心から慶びたいと思う。

付言すると、前述のように原著はさらに大部なものであるといい、訳者は一旦それを全訳の上、章やテーマを選択しながら全体を約半分にまで抄訳したという。抄訳であればこそコンパクトで読みやすい一般向けの書物ができるが、もともとが一般読者を想定して執筆されたものであり、このような面白い内容であればなおさらには全体が知りたくなるのもまた当然であろう。その意味では、原著の全体の構成を示しておいていただけるとありがたかった。また、白樺文書とのフィードバックの対象となつた基本的な文献資料である年代記について、もう少し詳しい説明が聞きたかった。ヤーニン氏は初版以来今回翻訳された第三版まで、本書をいすれも次のような言葉で締め括つているという。「白樺文書に関する本に最終章が書かれることはないだろう。」これは日本の木簡についてもそのままあてはまる。両者に実り多き続篇が書かれ、日本の木簡研究と白樺文書研究との学問的な交流がなお一層進展することを期待して、拙い紹介を終えた。

なお、夙にノヴゴロド白樺文書について興味をもち、ヤーニン氏の木簡学会への招聘を懇意されたのは、田中琢氏であった。本書刊行のいわば影の立役者であることを最後に明記しておきたい。

（二〇〇一年五月山川出版社刊、四六版三三八頁、本体一八〇〇円）